第２学年「図画工作」学習指導案

授業者　小沼　律子

２月２０日（金）　２階アトリエ２　　１０：００～１０：４０

１　題材名　ひびきあうアトリエ　―ひらかれる―

（１）題材について

これまで本部会では、子どもを一人の個人で完結した存在としてではなく、ひと・もの・こと・場などの様々な他者との関係の中で変わり続ける存在として捉え直し、子どもが物事をわかっていく過程に目を向けた「アートメタ認知」を提案してきた。今年度は本部会の研究テーマを「ともになっていく」と更新し、子ども自身の意図や判断にとどまらず、関係の中で生起する出来事や変化そのものに目を向けることで、アトリエでの学びを生成のプロセスとして考える。

２年生の子どもたちは、これまでの図画工作の学習を通して、材料に触れ、試し、友だちの表現に出会いながら表す経験を重ねてきた。その一方で、学校という場には、時間や空間、活動の進め方などの制約が存在し、表現の途中に生じる変化や揺らぎが十分に生かされにくい場面も見られてきた。

図画工作では、そうした制約を単に取り除くのではなく、表現を方向づけ、新たな関係や出来事を呼び起こす要因として捉え直すことを「制約のデザイン」と名付け、アトリエという学習環境の構成や材料の配置、活動の枠組みを意図的に設定してきた。

そこで、本題材では、2014 年に行った「行為が形になっていく～毛糸の世界を共に創る～」の授業で見られた「場の変容」や、これまでの研究の蓄積を踏まえ、アトリエという学習環境そのものを中心に据える。アトリエを単に制作だけの場ではなく、材料の配置や他者の存在、動線や視線などが相互に影響し合う中で、出来事が立ち上がっていく生成の場として捉える。



図１「行為が形になっていく」2014.6 年生アトリエに、白い糸をつないだり、切断したり、つなぎ直したりした。

授業では、何を完成させるかをあらかじめ定めるのではなく、置く・重ねる・つなぐといった行為を通して、形や配置、構造が変化しながら主題が立ち上がっていく過程に価値を見いだしたい。また、８つのグループが同時に活動する構成とすることで、それぞれの経験や見え方が重なり合い、友だちの行為や言葉、材料の性質や場の状況がきっかけとなり、表現が更新されていく様子にも目を向けていきたい。



図２ アトリエを暗闇にして、ブラックライト使い、場が一変する経験を共有した。
子どもたちは、糸の結び目や色、場に応答していった。

本題材の構想にあたっては、人間以外のものや空間も含めて出来事の生成を捉える視点について検討を重ねてきた。ひと・こと・もの・場など様々な他者が互いに関わり合いながらともに変容する中で、表現や主題が立ち上がり続ける学びの姿を、図画工作科の授業として具体化することをねらいとしている。

３　学習指導計画（２時間目／全５時間）

① アトリエ２の材料や場に出会い、関わり始める …… １時間
② グループで、置く・重ねる・つなぐ活動を通して表す …… ２時間（本時）
③ 表現の変化や出来事をふり返り、関係の中で生まれたものごとについて対話する …… ２時間

４　本時の学習について

（１）本時のねらい

ひと・もの・こと・場など、様々な他者との関係の中で立ち上がる表現や主題を感じる。

（２）予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
１　アトリエ２を見渡し、前時に出会った材料や場を確かめる。 ２　グループで関わり、様々な行為をやってみる。 ３　ふりかえる。	・起きていくことを大事にすることを伝える。 ・変容したことに注目して声をかける。 ・次の活動につながりそうなことを共有する。